
恋ノ思イ出

狐狸川ころり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋ノ思イ出

【Nコード】

N2499C

【作者名】

狐狸川ころり

【あらすじ】

結婚二年目の沙穂は、久しぶりに昔の友達との飲み会に参加した。その中には沙穂が結婚前に好きだった人もいて…。

結婚して二年目、初めての飲み会。この日をとても楽しみにしていた。

だって昔の友達と久しぶりに会えるし、それに…あの人も来るから。

結婚前、私にはとっても好きな人が居た。一緒に居ると楽しくて、とってもドキドキして苦しかった。

でも、告白は出来なかった。

だって彼には好きな人が居るって知ってたから。その人が、自分じゃないって知ってたから。だから二人の関係を壊したくなかった。皆と一緒に笑って、遊んで、それで良いと思ったから。

実ノラナカッタ恋ホド美シイ。

それでも、忘れられない出来事がある。

私の宝物、旦那には言えない私だけの小さな秘密。

一度だけ、たった一度だけ…彼が私の手を握ってくれた。心臓が止まりそうな程とってもドキドキして、恥ずかしくて、嬉しくて、下を向いた。

その時、何で彼が私の手を握ってくれたのかは知らない。でも、今でもそのときの事を思い出すとドキドキする。

貴方ハ、ドウシテ私ノ手ヲ握ツタノ？

「久しぶりー！！きゃー皆変わんないねー！」

「お、来た来た」

「新妻・沙穂のお出ましたよー」

「やだなー！理恵ちゃんこそ、神田くんと来月結婚じゃない！未来

の旦那様はどうしたの？」

「いいのよ、ウチは！腐れ縁みたいなモンなんだからっ。そっちこそどうなのよ？旦那とはまだラブラブなんでしょー？羨ましいな、このー！」

「へっへー。当然じゃない！ンもう毎日ハッピーよう！」

「ヤダヤダ、久しぶりに顔出したと思ったら、早速お惚気かよ！全く、寂しいボクちゃんたちの身にもなってくれよなー？な、正也せいぜ！」

一瞬、目が合う。意識しないようにすればする程、なんだか不自然。あんまり変わってないんだ…。

「全くだねえ…。いっそ、俺たちラブラブになっちゃおう？」

「イヤン！正也のエッチ！」

「バカねーアンタたち！だから女が出来ないのよ！」

皆が声を立てて笑う。こんなので、久しぶり。なんだか昔に戻ったみたいで凄くワクワクする。

私たちは皆、年齢も仕事もバラバラ。知り合いの飲み会とかイベントとかに顔を出すうちに、自然とこの五人で仲良くなった。

来月結婚する理恵ちゃん二十六歳、彼女はデパートで化粧品の販売員をしている。だからいつもバツチリと流行のメイクを決めて、お洒落にも気を使っていつもカッコイイ。

神田くん二十九歳は理恵ちゃんと七年間付き合った彼氏だ。今は外資系の会社で働いてるって言ってたなあ。とっても無口で、理恵ちゃんとは対照的。でも歳は私と同じだから、割と私とは話が合う。江田くん二十六歳、デパートでの紳士服販売員。いつもふざけて、理恵ちゃんを怒らせて遊んでる節がある。見てくれはそれなりになのに、性格がもの凄い三枚目。お笑いが無い人生なんて考えられないって口癖、まだ変って無いみたい。

そして…田辺たなべ正也二十四歳フリーター。性格はどちらかっていうと、江田くんみたいで、二人は良くつるんでるらしい。ちよつと、何を考えているか分からない不思議系な所があるけど、黙ってれば本当にカッコイイと思う。

彼が：私の好きだった人。

「何処行く？」

「まずは居酒屋！！次、カラオケ、そんなもって、ボウリングー！！」

「いいねー！」

「行こう行こう！」

「よっしゃー！しゅっぱーっ！！」

昔みたいに、いっぱい飲んでたつくさん笑って、騒いで、楽しくて楽しくて。

そんな時、携帯が鳴った。

旦那からのメール。『何時に帰るの？駅まで迎えに行くので、連絡下さい。気をつけてね』遊びに来た私に、昔の好きな人に会えて浮かれている私に、優しい気遣いの言葉。

なんだか、凄い罪悪感。

悪い事なんかして無いのに、とつても後ろめたい。チラリと時計を見やると、時計の針は午後十一時を指そうとしていた。

「あ…。ごめん！そろそろ私、帰らなきゃ！」

私は皆に謝って、理恵ちゃんにお金を渡すと急いでカラオケを後にした。昔、散々酔っ払って歩いた駅までの道。景色はやっぱりあんまり変ってなかった。

「ちよっと、飲みすぎたかな？」

旦那に今から帰る旨をメールする。

でも、なんだか、足元がふらついて手元もなかなか怪しい。

「およよよ…」

今まで気付かなかったけど、自分でも可笑しくなるくらいの酔っ払いだ。実に真っ直ぐ歩いちゃいない。しまったなあ：ハイヒールなんか久しぶりに履いたもんだから、余計に安定しないし、足も痛くなってきた。ちやっ。

こりゃイケナイ。

メールの内容を、'帰るね'から'迎えに来て'に変更しなきゃ。

集中してメールをうつため、近くにあった自動販売機に寄りかかる。
「自販機って、明るくていいなあ」

何でも無いことだけど、街頭の明かりよりもっと明るいから、意味もなくちよつと嬉しい。

「ナニ、言ってるの？」

「んん？」

誰も居ないと思って言った独り言に、思わぬ反応があつてビックリ。しかも、この声は…。

「はい、ちよつと右にずれて。ボタン押せないから」

「あ、ごめん」

「正也くん、だあ…。」

「って、ど…どうしたの？み、みんなは居るの？」
辺りを見回す。

「居ないよ。…俺、用事があるから」

彼も自販機に寄りかかりながら、プシュツとブルトツプの軽い音を立てた。その彼の答えに、なんだか良く分からないけど、ちよつとホツとする。

人通りの途絶えた商店街は思いの外静かだ。この時間じゃ猫だつて大人しくしているに違いない。

深夜、二人きりの時間だなんて…ちよつとドキドキする。

「なんだあ。相変わらず忙しいんだねえ。ねえそうだ！とうとう、念願かなつて芳香^{よしか}ちゃんと付き合ってるんだって？うらやましいねえ、この！芳香ちゃん美人だし、頭良いし、気立てもいいし、もう非の打ち所が無いってヤツ？ライバル多いから、振られないようにしつかり捕まえなきゃだめだよー」

「……そだね」

缶に口を付けながら、真つ直ぐ正面を見据えて彼は歯切れ悪く答えた。

「…どしたの？何かあつた？」

「別に」

沈黙。

二人とも隣同士で立ちながら無言になる。なんだかとても居心地の悪い雰囲気。私、何か悪い事いったかな？どうしよう？

「あ……」

「あのさ。…なんで、沙穂は結婚したの？」

言葉の出だしが被った。私は言葉を呑み、正也くんは言い切った。

「なにー？どしたの、突然」

「気になったから」

正也くんは相変わらず正面を向いたまま、無表情で缶の中身を飲んでる。

「んんー…。なんでって改めて聞かれると、ちょっと困っちゃうなあ。年齢的なものがない訳じゃないケドね。でもね、単に好きって言うよりも、なんて言うのかな…んー。ああ、この人と結婚したら楽しいだろうなって、思ったから、かな」

「ふーん……」

正也くんは詰まらなそうに缶を傾けた。

「あー、もう！人がせつかく真剣に答えたのに！なによー！」

ちよつと真面目に答えただけに恥ずかしい。

携帯のストラップを握って、頬を膨らませるように口を尖らす。

そのまま、相手の顔を覗き込んでやる。

「正也くんのイジワル！」

「バーカ」

一瞬、目が合った。

「きゃっ……！」

正也くんが突然、私の体を力任せに引き寄せた。その反動で思わず手に持っていた携帯が、硬いコンクリートの上に落ちていく。あまりにも突然の出来事で驚いた私は、思わず傍を離れようと体を振った。

「好きだ……」

頭の中が真っ白になる。

「うそ…」

「本当。ずっと、ずっと、ずっと、ずっと…好きだったんだ」
私の肩を抱き寄せた、正也くんは腕に力がこもる。

「だって、前に芳香ちゃんが好きだって…」

「ホントのことなんて、皆の前で言えるかよ」

ヤメテ。

「なんで結婚なんかしたんだよ」

ヤメテ。

「だって、だって、旦那さんのコト好きだし、プロポーズ…」

「俺のこと、嫌いか？」

ナンデ、ソシナ事ヲ言ウノ？

「違う！嫌いとか、そんなんじゃない…」

「じゃ…好き？」

正也くんはいつに無いほど真剣な目をしていて。

「…ねえどうしたの？冗談やめてよ」

笑って誤魔化そうとしたけど、正也くんは相手にしてくれなかつた。

「好き？」

好きダヨ。

でもソレは言っではいけない言葉。

アナタノコトガ、好きデス。

絶対に、死んでも、口にしちゃいけない言葉。

「止めて。痛いよ、痛い…」

涙がポロポロ零れ出す。

「あ…」

正也くんは力なくそう言うと、私の体から手を離す。とっさに私は携帯を拾うと急いでその場を離れようとした。

でも…。

「…なんで、今更そんなコト言うの？私の気持ち、全然考えてくれてナイ」

だからと言って、結婚前に言われたとしても、それでも、きつと私たちの結果は変わらない。

「バイバイ」

私は足の痛みも忘れて走ってその場を離れた。

胸がズキズキ痛んで、咽の奥が締め付けられるように痛かった。

バランスが不安定なハイヒール。

「あ！」

私はまるで漫画のヒロインのように盛大に転んだ。

そのせいなのか、ヒールが片方ポツキリと折れていた。なんだか今の私の気持ちそのものみたい。

泣きたい気持ちで一杯だ。嗚咽が舌の根のところまで上がってきている。

「何なのよ、もう！」

そんな私の気持ちを察してか、携帯の着メロが鳴り出す。

発信者は旦那。

「はい…」

「今、どの辺り？もう直ぐ駅に着くよ」

「まだ、商店街」

「どうしたの？何かあった？」

この人はいつも勘がいい。

「ん、ちよつとね。転んだの。ヒールが折れちゃった…」

「大丈夫？怪我は無い？」

暖かな声、優しい言葉。どんどん緊張が解けてくる。

「…イタイ。足が、痛いよ…足がいたいよう」

心も痛いよ。

「だ…大丈夫？いま、すぐ行くから。立てる？何か目印ある？」

「わかんない、なんにも、わかんない…うえええん」

旦那はいつも私に優しい。

結婚で、好きだとかドキドキだけでするもんじゃないって、この人が教えてくれた。温かくて、大切に、卵みたいに壊れやすい。

「大丈夫、直ぐ行くから、ね？」

「うん、うん…ひっく、えっ」

実ノラナカッタ恋ホド美シイ。

そう、それでいい。

さようなら、正也くんを好きだった私。

(後書き)

十代の頃の純粹に恋愛、というより、大人になった少し斜めな恋愛です。(だと思えます)

読んでくださった方、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2499c/>

恋ノ思イ出

2010年10月8日14時30分発行